道路ユーザーネットワーク広場

NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK NETWORK

☆三好礼子の☆ ナチュラル・ロード

今年のTシャツは大谷くん風！松本から参加のミスバイクたちと。

三好礼子
エッセイスト・元国際ラリースト
～http://www.fairytale.jp/～

9月末に素敵なツーリングをしてきました。新潟県南魚沼市に集まったメンバーは、パワフルでメガトン級に楽しく、道中に尋ねた場所は予想を遥かに超えて感動的。帰ってきてすぐまた行きたくなるところでした。20代に始めたバイク雑誌のコラム「ミスバイクプレス」が縁で広がった女性ライダーの輪は、バイクブームであっという間に膨張し、「潜在的に一万人にいるのでは?」と名付けた「ミスバイク一万人大会」も、1984年に始まり、今回で37回目。ボランティアスタッフが手弁当で準備し、全国各地で開催します。平均100名、多い時は200名ほどが集合しましたが、今回は宿の施設工事の関係で58名。でもコロナ禍で4年ぶりとあって、3倍いるのかな?と思うほど賑やかでした。リピーターが多く年齢層も50代が中心ですが、親子参加も珍しくなく、とうとう3世代で来る人も出現。会話は弾み、毎年この笑顔に出会うために体力つけて頑張ろうと思えた再会でした。

さて、新潟ならば必ず伺おうと思っていた場所がありました。ドイツ人の建築デザイナー、カール・ベンクスさんが古民家再生で蘇らせた十日町市松代にある竹所（たけところ）集落と、歴史ある旅館を再生した「カールベンクス古民家カフェ『澁い』-SHIBUI-」。季節を追ってテレビで紹介されていますが、見るたびにその自然体と情熱と人とのつながりに惹かれました。尋ねると考えるだけで初恋の人に会うようにドキドキ。果たしてそこは…、「いやあ～、行ってよかった!」。午後遅くの雨後で観光客が少なかったこともあり、堪能できました。美味しい喫茶タイムのあとは、見学が可能という2階へ行くと、そこにはカールさんのこの土地と再生への想いが溢れる絵画や書がいっぱい。日本の伝統建築と欧州生まれのカールさんのセンスとのコラボが絶妙で、とてつもなく居心地のいい空間が広がっていました。正直、今までの知っている家の中で一番しっくり馴染んでビックリ。

そして15分ほど走って竹所地区へ。現在11件目の古民家再生に取り掛かっているそうですが、静かに暮らしを営む山の小道を、カラフルかつ自然に溶け込んでいる古民家を目にしながらそ～っと巡りました。徒歩マップがありますが、バイクの速さは意外とお邪魔にならなかったかも。半分を過ぎたところで、カールさんが1993年に買い取って最初に手がけた自宅の「双鶴庵」が見えてきました。その住まいが遠目にも素敵すぎて、涙がでます。車があるので、「カールさん居らっしゃるのかな。奥様のティーナさんもいるのかな」などと思いながら通り過ぎたら、庭の池からサギがふわっと飛び立ちました。まるで絵画。感動が止まりません。ルールの中で徘徊を許可して下さることに、感謝いっぱいでした。

そして、予約していない絶景ポイントの「清津峡」の渓谷トンネルへ。宿への通り道なので、どんな感じなのかだけでもと見に行くと、16時半入場というリミットをわずかに過ぎていたのに、エントランス施設の係員の配慮でラストのお客で入れ頂き、往復1・5キロを猛ダッシュ（この期間の入場予約は不要でした）！結果、待ち時間ゼロ、写真バッチリという信じられない幸運に恵まれました。インスタ映え・心地よさ・ユニークなアートの全てを味わえるここは、今や国民的人気スポットですが、想像以上に楽しかった～。国際的な建築事務所「MADアーキテクツ」とのコラボが効いていますが、トンネル口から見える渓流脇の遊歩道も気になります。「きっと又来そう」と、お気に入り地点となりました。とにかく旅は、ご縁と奇遇と偶然の連続。知人女性ライダーお勧めの「魚沼スカイライン」は、短くて細くて山が低かったのに、「このサイズ感ってなんだか楽しい」とハマってしまったので、次回も行くことでしょう。古い&新しいものや人や景色との出会いで、すっかり身も心もリフレッシュした私。笑顔でこの暑い夏を締め括ることができました♪

5つの展望台からは、山と盆地と河岸段丘が楽しめる全長20キロの魚沼スカイライン。

南魚沼市に大集合した58台のバイクと、とびっきり元気な女性ライダーたち♪

イベントを盛り上げてくれたティラノザウルスたち。中は素敵なアスリート。

100年の風格はそのまま、活き活きと甦ったカフェ『澁い』とカールさんの双鶴庵（左下）。

自然もアートも似合う清津峡渓谷トンネル。紅葉や雪景色のシーズンも来てみたいな。

九州の散歩道

おんせん県で「サウナ」が話題?

フリージャーナリスト　湯浅玲子

温泉の源泉数・湧出量ともに日本一を誇り、「おんせん県」として全国的にPRしている大分県。そんな大分県で、温泉が出ない数少ない自治体のひとつが豊後大野市です。正直なところ、九州在住者でも豊後大野という地名にはあまり馴染みがなかったのですが、最近その名をよく聞くようになりました。「おんせん県」なのに温泉がない、そんなデメリットを逆手に取り「サウナのまち」として売り出したからです。

最近はサウナブームで各地にサウナ施設ができ、テレビ番組もつくられるようになりました。さらに、新型コロナの影響でアウトドアのレジャーを楽しむ人が増えています。サウナはフィンランド発祥で、もともと自然の中で熱気浴を楽しむもの。温泉はなくても手つかずの自然はあるじゃないか、ということで豊後大野ではサウナによる町おこしが始まったのです。

市内各所にあるサウナは、どれも場所の特性を活かしたものばかり。川沿いのカフェにあるサウナでは、サウナの後に川まで下りて天然の水風呂を楽しみます。その誘導路には「日本一導線の悪い水風呂」とユーモアあふれる一言が。捨てられるはずだった廃材を利用したサウナ小屋や、キャンプ場や宿泊施設に設置されたテントサウナもあります。極め付けは観光スポットのひとつである「稲積水中鍾乳洞」のサウナ。洞内の温度は年間を通じて16℃、透き通った幻想的な水中鍾乳洞を水風呂にできるという、何とも贅沢なサウナです。

こうしたサウナ施設の多くには若いオーナーがいます。もともと豊後大野で「サウナによる町おこし」を始めたのも、Uターンやーターンしてきた若者たち。2019年に初めてのサウナイベントを開催すると、その可能性に気づいた若者たちが地域の人々を巻き込んでいきます。ついにはアウトドア・サウナ協議会「おんせん県いいサウナ研究所」を立ち上げ、市長が「サウナのまち」を宣言するまでになりました。

これまで人々が通過するだけだった豊後大野は、一躍全国のサウナーが注目する町に。九州で唯一、日本ジオパークとユネスコエコパークの両方に認定され、東洋のナイアガラとも呼ばれる「原尻の滝」などがある豊後大野。もともと自然景観が豊かで、こうした従来の観光資源にも注目が集まるようになっています。

（写真提供：九州旅ネット）

幻想的な光景が広がる稲積水中鍾乳洞

サウナで汗をかいた後は目の前の清流へ

ハッと思いました

ふと気づくと、マスクをしている人はちらほら。流行だったのか、ブームの移り変わりのなんて早い事。今では多くの人が、腕にマスクを引っ掛けて持ち歩いていますね。これもまた流行のスタイルなのでしょう。

私がこのコーナーに、色々と書き始めた頃、「交通事故はゼロに出来る」みたいな事を書いた記憶があります。その根拠は、クルマはモノで人が動かして初めてクルマの機能・仕事をするのだから、操る人が正しければ事故は起きないと言う考えからでした。

ところが近年、事故ゼロに向かって、人を排除した所でクルマ・機械・AIが担っている様です。正直な所、それも仕方ないと思う部分もありますが、一〇〇%信頼して命を預けられるのかと言えば・・疑問?

みんなAI大好きで踊らされている風に見えます。

ちなみにAIはアーティフィシャル・インテリジェンス（Artificial・Intelligence）＝人工知能の略。日本人はカタカナ英語、アルファベット、略語が好きで、本質・本来の意味が理解できていなくても雰囲気で知った気になる事が出来るから・・。何故なんだろう。

今の日本人に欠けているものは何かな?と考えると、なんとなく見えてきました。それは、忍耐力と持続力、加えて創造力（創意工夫力）と責任感だと思います。だから何か起きた場合、想定外なんて言葉が氾濫してしまうのでしょう。この傾向は今後益々進んで行きそう。

科学や技術、機械は人の暮らしを豊かにするための単なるツールです。さらに赤ちゃんから老人まで、ハンディキャップのある人、万人のために存在すべきモノなのです。AIがどれ程のものかは知りませんが、人の存在を忘れてはいけません。人を超えるものでもありません。その上で、新たな生活スタイルや交通スタイルを見つけたいです。